

8	愛知	日進市立日進中学校	イノウ ユウタ 名前 伊藤 祐太
分科会番号	03a	分科会名	社会科教育(小学校)

歴史を学ぶ意味を実感できる児童の育成

— 外化・問い・振り返りを中心とした学習活動を通して —

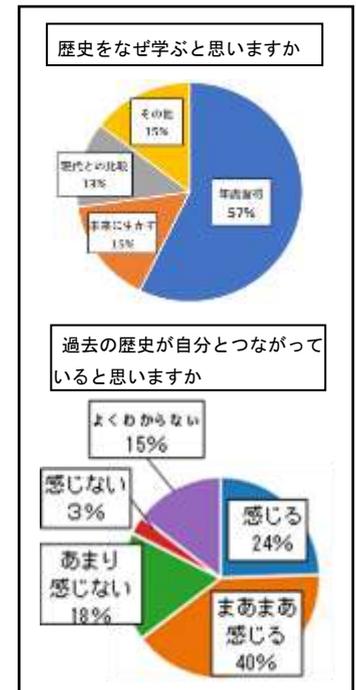
1 主題設定の理由

学習指導要領（平成 29 年告示）では、歴史学習で身に付けるべき力として、「我が国の歴史上の主な事象を捉え、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考えること」と述べられている。このように、歴史学習は単に知識を習得する学習ではなく、歴史の学びを現代、さらには未来の自分や社会に生かしていくねらいをもっている。

歴史学習を始める前に、竹の山小学校の 6 学年全児童を対象に事前調査を行ったところ、「歴史をなぜ学ぶと思いますか」という質問に対して、約 57%の児童が知識の習得を目的とした回答をした。また、「過去の歴史が自分とつながっていると思いますか」という質問に対して、約 3分の1の児童が、「あまり感じない」「感じない」「よく分からない」と回答した（資料 1）。これらの回答から、歴史は覚え込むものであるという認識により、歴史と現代に生きる自分達とのつながりを感じられないという児童の課題が浮かび上がってきた。

このような実態から、歴史を学ぶ意味を実感させるためには、まず、知識の習得を目的と考える児童の意識を変化させる必要があると考えた。そのために、既習の知識を用いて思考したり、説明したりする活動（外化）をさせることで、歴史に対する考えや理解を深められるようにしたい。また、明確な視点を与えて振り返りを記述させることで、深めた考えや理解を基に歴史的事象と現代とのつながりを感じさせ、歴史を学ぶ意欲につなげたい。

以上のことから、研究主題を「歴史を学ぶ意味を実感できる児童の育成」として設定した。



資料 1 事前アンケート結果

2 研究の仮説と手だて

(1) 目指す児童像

歴史を学ぶ意味を実感できる児童

(2) 研究の仮説

思考を深める問いを与え、ペアでの対話を中心とした活動や視点を明確にした振り返りをさせれば、歴史的事象と自分とのつながりを考えようとするができるだろう。

(3) 研究の手だて

ア ペアでの外化

外化とは、分かったことを自分で話したり、記述したりすることである。本実践では、授業

の中で意図的にペアでの外化を複数回行わせる（資料2）。ペアでの外化の前には、焦点を絞った発問を行い、学級の全員が同じ立場で話し合うことができるようにする。外化をさせた後には、全体の場で意見の交流を行う。また、ペアの一方が聞き手だけにならないように、話す順番を指定したり、「深まる言葉」（資料3）を使って声を掛け合えるように指示をしたりする。

- ① 前時の学習内容の確認
- ② ワークシートに自分の考えを書いた後
- ③ 教師の「5W1H」の問いの後
- ④ まとめを記述する前

資料2 外化の機会



資料3 深まる言葉

イ 「5W1H」の問い

めあてを「5W1H」の問いの形で児童に提示し、まとめをその問いの答えとして、児童自身に記述させる。意見交流の際には、「何色か」「どのような形か」「何で作られているか」「何のために使われたか」と「5W1H」の視点から問いかけ、資料を読解させる。

ウ 視点を与えた振り返り

授業の終末時に、視点を与えて振り返りを記述させる。振り返りには、右の資料のように①から④の4つの視点を与える（資料4）。視点①②を与えることで、学習内容についてもう一度自身の言葉で表現させ、思考を整理させる。視点③を与えることで、授業の中で触れた仲間の意見を想起させ、様々な解釈の仕方や多様な価値観があることに気付かせる。視点④を与えることで、現代との相違点を考えさせ、歴史的事象と自分とのつながりに気付かせる。また、視点③④の振り返りを中心に授業の導入で紹介し、学級の全員が多様な考えや過去と自分とのつながりに気付く機会を増やす。

- ① 学習内容の整理
- ② 学習して思ったこと
- ③ 仲間の考えに対する意見とその理由
- ④ 現代との相違点

資料4 振り返りの視点

3 研究の方法と計画

(1) 実施単元

「縄文のむらから古墳のくにへ」「天皇中心の国づくり」

(2) 研究の対象

日進市立竹の山小学校6年生 107名

(3) 検証方法

ア 事前・事後アンケートを実施し、仮説に対する児童の意識の変化について分析する

イ 抽出児童を継続観察し、記録、分析を行う

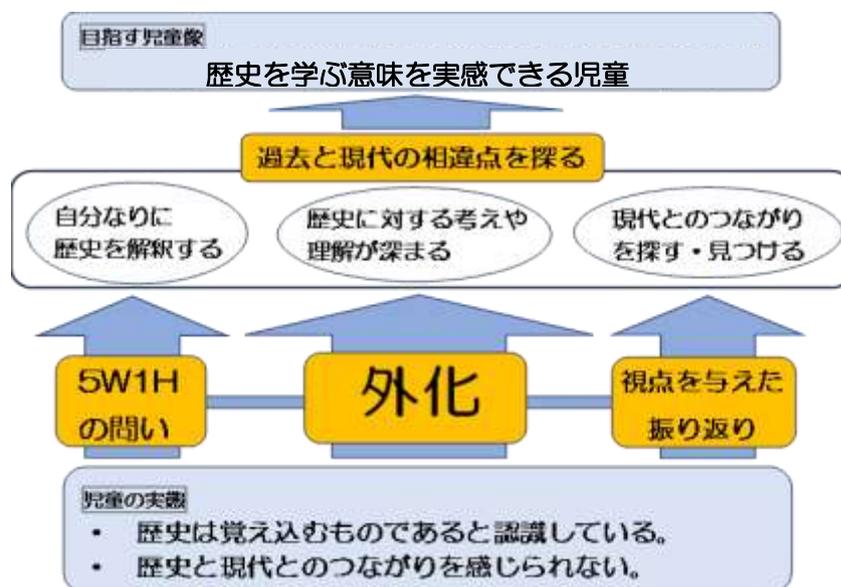
(ア) 抽出児童A

どの教科においても、意欲的に取り組んでいる。資料から情報を読み取り、既習の知識と結びつけながら、自分の考えをまとめることができる。事前アンケートでは、歴史を学ぶ意味について「今までどんな人が何をしていたか詳しく知るため」と答えた。

(イ) 抽出児童B

歴史学習に対して、昔に起きたことを覚える学習という認識をもっている。資料から情報を読み取り、自分の考えをまとめることが苦手である。事前アンケートでは、歴史を学ぶ意味について、「学ぶいろいろな昔の文化があるから勉強になる」と答えた。

(4) 研究構想図



4 研究の実際

(1) 実践

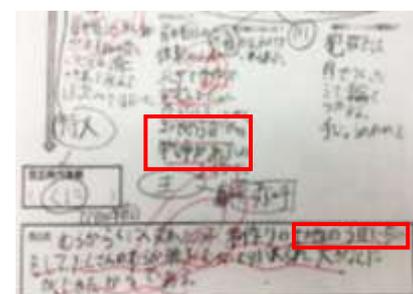
ア ペアでの外化

手立てにも記したように、①から④の4つの外化を軸にして授業を実践した。第3時では、縄文時代と弥生時代の暮らしについて「衣」「食」「住」の視点から比較する学習を行った。授業の導入で、「縄文／弥生時代では、どのような暮らしをしていましたか。」と既習の知識を想起させる発問をし、ペアで説明させた(①の外化)。その際に、前時までのまとめを見ずに説明するよう指示をしたところ、悩みながらも、多くの児童が自分なりの言葉で説明する姿が見られた(資料5)。



資料5 外化の様子

第4時では、「むら」から「くに」へと変化した理由について学習した。「なぜ、縄文時代になかった争いがこの時代で起きたのでしょうか。」と問い、ペアで話し合わせた(③の外化)。その後、児童Aが「土地の奪い合い」という視点で考えを述べたところ、あいづちをしたり、同じだと反応したりする児童が多かった。そこで、「Aさんが言っていたのは、つまりどういうことですか。」と問い、ペアで説明をさせた。うなずいていた児童の一人は、このペアでの話し合い後に「土地の奪い合い」の考えを付け足し、まとめにも記述していた(資料6)。



資料6 うなずいていた児童のワークシート(第4時)

イ 「5W1H」の問い

縄文のむらから古墳のくにへ

時	めあて (5W1H)
1	縄文時代の人々はどのような暮らしをしていたのだろうか
2	弥生時代の人々はどのような暮らしをしていたのだろうか
3	縄文時代と弥生時代では、暮らしはどのように変わったのだろうか
4	なぜ、むらからくにへと変わっていったのだろうか
5	古墳は、だれが、何のために、どのように作られたのだろうか
6	国土は、どのように統一されていったのだろうか
7	学習した3つの時代と今の暮らしには、どのようなつながりがあるのだろうか

天皇中心の国づくり

時	めあて (5W1H)
8	聖徳太子はどのような国づくりを目指したのだろうか
9	中大兄皇子らはどのような国づくりを進めたのだろうか
10	奈良時代の人々は、どのような暮らしをしていたのだろうか
11	聖武天皇は、どのように国を治めたのだろうか
12	大仏造りは、どのように進められたのだろうか
13	奈良時代に日本は、大陸から何を学んだのだろうか
14	飛鳥・奈良時代の人々は、何を目指したのだろうか

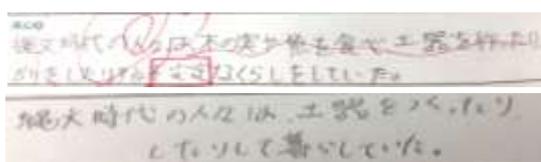
資料7 「5W1H」のめあて

めあての全てを「5W1H」で設定し、主発問や補助発問についても、できるだけ「5W1H」で問うことを意識して実践した(資料7)。また、希望する児童に対して「5W1H」の視点で具体的な問いを入れたワークシートを配付した。追究の視点がより明確に示されることにより、自力で資料を読解することのできる児童が増えた(資料8)。

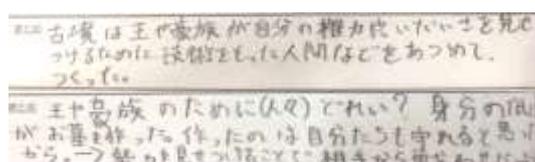
まとめについても、当初は論理的に説明できていなかったり、めあてに対して見当違いの記述をしていたりするものが多く見られた。第1時では、まとめに用いるべき言葉は何かを問いかけ、ペアで話し合わせたところ、「狩り」「木の実」「道具」などの言葉が一部の児童から出された。これらの言葉を用いてまとめを記述させたところ、具体的に記述できている児童がいる一方で、理解が深まっていない児童も見られた(資料9)。第5時では、児童から出た「権力(勢力)」という言葉に着目し、その言葉を選んだ理由についてペアで外化をさせた。すると、「権力を見せつけるため」や「戦いを防ぐ」など、具体的なまとめの記述が見られた(資料10)。



資料8 具体的な問いを入れたワークシートと児童の記述

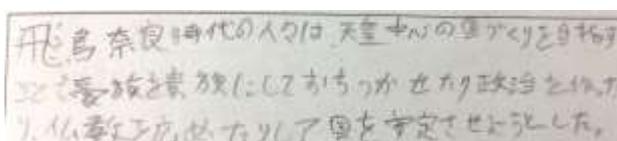
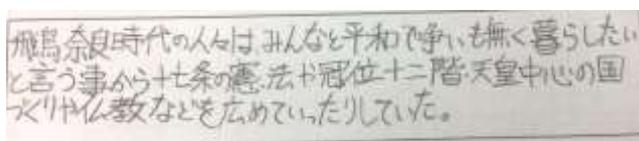


資料9 具体的なまとめ(上)と理解が深まっていないまとめ(下)



資料10 具体的に記述できるようになったまとめの例

以後の学習でも同様の取り組みをしたところ、第14時では、飛鳥・奈良時代の人々が、天皇中心の国づくりを目指した理由について、その時代の人々の思いに着目したり、当時の施策やその利点に焦点を当てたりするような記述が見られた(資料11)。

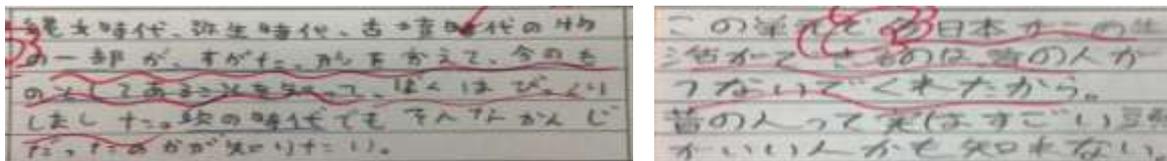


資料11 自分なりに歴史を解釈しているまとめ

ウ 視点を与えた振り返り

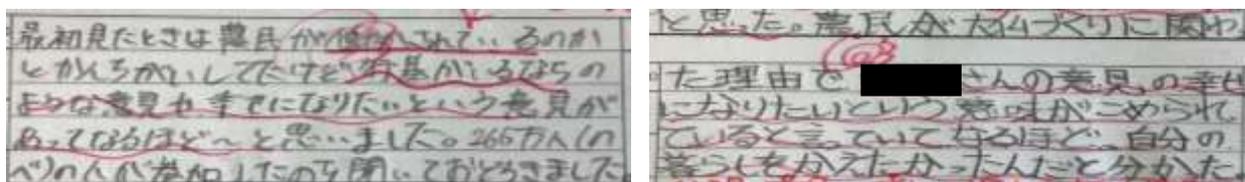
第1時や第2時では、学習内容を整理したり、自分の感想を書いたりする内容の振り返りが多く見られた。自分が興味をもったことや次時に学びたい内容を記述した児童も見られたため、それらを授業の導入で紹介し、本時の学習へとつなげていった。

第7時では、②の視点で振り返りを記述させた。すると、過去の時代の一部が現代でも形を変えて受け継がれていることに気付いたり、現代の生活は先人がつないだものであると歴史について考えを深めたりする記述が見られた（資料12）。



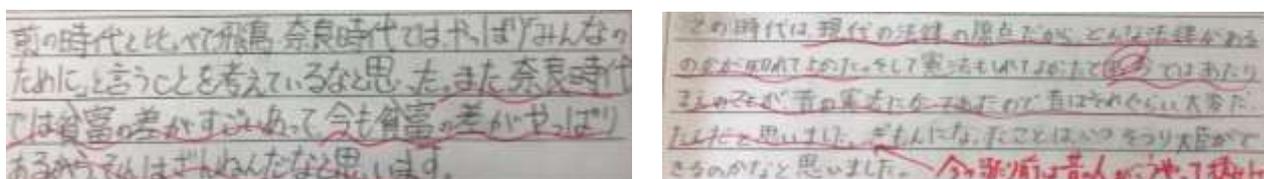
資料12 過去と現代との関わりを記述した振り返り

第12時では、ペアや全体交流で多くの意見が出されていたため、③④の視点から振り返りを記述させた。仲間の様々な考えに対して納得し、考えを深めていた（資料13）。



資料13 多様な考えを認める児童の振り返り

第14時の振り返りでは、飛鳥・奈良時代の出来事や様子に関連付けたり、現代との相違点に気付いたりする記述が多く見られた。「法律」や「天皇」など現代との直接的な関わりや、「貧富の差」という現代との概念的な関わりを見出していた（資料14）。



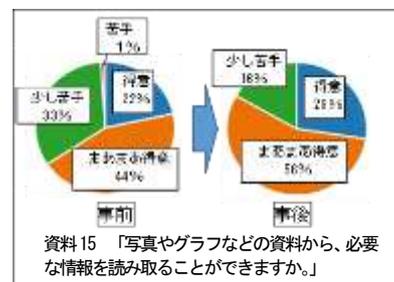
資料14 現代とのつながりを見出している児童の振り返り

(2) 考察

ア 事前・事後アンケートによる児童の意識の変化

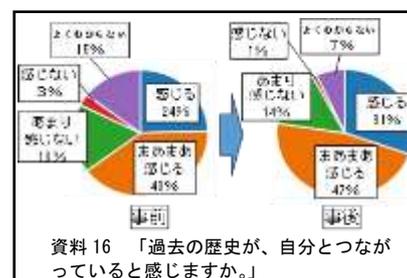
(ア) 資料から情報を読み取る力の高まり

質問に対して「得意」「まあまあ得意」と答えた児童の割合が増加した。また「少し苦手」と答えた児童の割合が減少し、「苦手」と答えた児童が0人になった（資料15）。資料から情報を読み取ることへの苦手意識が改善され、得意意識をもつ児童が増えたといえる。



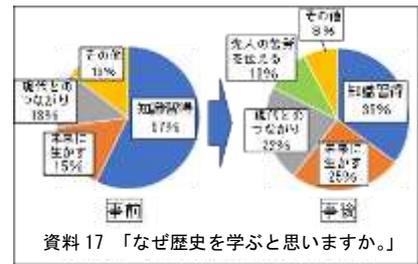
(イ) 歴史的事象と自分とのつながり

質問に対して「感じる」「まあまあ感じる」と答えた児童の割合が増加した。また「あまり感じない」「感じない」「よくわからない」と答えた児童の割合が減少した（資料16）。過去の歴史が自分とつながっていると感じる児童が増えたといえる。



(ウ) 歴史を学ぶ意味について

質問に対して「未来に生かす」「現代とのつながり」に関する内容を答えた児童の割合が増加した（資料 17）。歴史は覚え込むものであるという認識をもつ児童が減り、歴史を学ぶ意義を感じている児童が増えたといえる。



イ 抽出児童の変容

(ア) 抽出児童Aについて

振り返りには、当初「〇〇時代の人々は～をしていた。」「すごいと思った。」という記述が多く見られたが、過去と現代との相違点を考えるうちに、「税」や「政治」など、自分の身近な生活や知識と関連させながら歴史的な事象を捉えられるようになった（資料 18）。



資料 18 児童Aの振り返りの記述の変容

(イ) 抽出児童Bについて

アンケートの「なぜ歴史を学ぶと思いますか。」という質問に対して、「学ぶいろいろな昔の文化があるから勉強になる」から「歴史を学んで昔の人たちのことや、どんな感じで今の日本ができたのかがわかるようになるから」に回答が変わった。また、第3時と第14時の振り返りを比較すると、前の時代の歴史的な事象と関連させながら、自分なりに歴史を解釈する力が付いたことが分かる（資料 19）。



資料 19 児童Bの振り返りの変容

5 研究のまとめ

(1) 成果

授業の中で、ペアでの外化を随時取り入れることで、多様な考えを受け入れたり、思考を整理したりすることができるようになり、歴史に対する考えや理解が深まったと考えられる。また、「5W1H」のめあてや問いを与えることで、資料から必要な情報を読み取ったり、学習内容を自分なりに解釈したりすることができるようになったと考えられる。さらに、視点を与えて振り返りを記述させることで、多様な考え方や現代とのつながりについて気付かせることができたと考えられる。以上のことから、これらの手立ては仮説に対して効果的に働いたといえる。また、アンケートの結果にもあるように、ペアでの学習を通して、目指す児童像とした「歴史的な事象と自分とのつながりを考えようとする児童」に迫ることができたと考えられる。

(2) 課題

事後アンケートの中で、「なぜ歴史を学ぶと思いますか」という質問に対して、知識の習得のみが目的であると考える児童がまだ2割程度いた。これらの児童に対して、歴史を学ぶ意味についてどのように思考を深めさせるかが課題である。単元の終末に自由に追究する時間を設けるなど、児童自身がより意欲的に歴史学習に取り組める工夫を考え、実践していきたい。